カフカの『判決』における仮面の交換（Ⅱ）

― 作品内在的解釈と精神分析的解釈 ―

河　中　正　彦

承前

前編（Ⅰ）で私たちが獲得した認識は以下の諸点にまとめられる。

1）『判決』に関する従来の研究史をおおまかに分類すれば、第一に「伝記的・作品内在的」な方法、第二に「精神分析的」な方法、第三に「宗教的」な方法に分類できる。

それぞれの立場から『判決』の三人の登場人物を整理すると、以下のようになる。

『判決』	ゲオルク	ロシアの友人	ゲオルクの父
伝記的解釈	市民としてのカフカ	作家としてのカフカ	カフカの父ヘルマン
精神分析的解釈	自我	エス	超自我
宗教的解釈	西方ユダヤ人	東方ユダヤ人	神

2）これらの方法は、突き詰めていけば、最後には他の立場に通底していて、相互に翻訳可能な関係にある。拙論は精神分析的な立場を採るが、「伝記的・作品内在的」な方法と「宗教的」な方法にも矛盾なく透過でき、それらを体系のなかに繰り込めるまで、方法を深化精錬して行く。

3）『判決』についてのカフカの自註(T.491～2)は、その難解さ故に多くの研究者によってむしろ回避されてきた。しかしカフカにおける所有概念の独自性に着目すれば、真正面から分析可能である。その核心は、所有者に敵対する所有物は「もはや彼の所有物ではない」(BKB73～4)という命題と「彼と彼の所有物は一つではなく、二つであり、その結びつきを打ち砕くものは、彼をも一緒に打ち砕く」(T 114) という命題で解明できる。『判決』の父は、ゲオルクと友人の「結びつきを打ち砕く」ことによって、ゲオルクを打ち砕くのだ。

私たちはこのような成果の上に再度ロシアの友人とは何かを問わねばならない。

Ⅷ）再度　作家（ロシアの友人）とは何か？

友人に関する父の態度は、四度変更される。

1）「おまえは本当にペテルブルクにこの友人がいるのかね？」(D 52)

2）「おまえにはペテルブルクに友人などいはしないのだ。おまえはいつもおどけていた。だから私に対してもそれを抑えられなかったのだ。いったいおまえがどうして選りによってそこに(gerade dort)友人がいるはずがあろう。そんなこと俺には信じられんぞ。」(D 53)

3）「たしかに俺はおまえの友人をよく知っている、彼は俺の心にかなった息子であろうに。」(D 56)

4）「俺は当地での彼の代理人だ」(D 57)

ポリツァーはこの箇所について次のように述べている。

「友人はロシアの広大な大地に成功に見放された卑小な実業家として、疑いもなく存在するのである。しかし同時にこの友人はゲオルクとその父にとって象徴の姿を纏ってしまった。象徴として彼は現実的存在という性格を、現実に存在することをやめてしまったといえるまでに、失ってしまったのだ。」(Politzer 94 強調引用者)

しかしロシアの友人が象徴というのなら、ゲオルクだってそれに劣らず象徴、市民としてのカフカの象徴である。ヒーベルが指摘しているように、ラカン風に言えば、また父も、布団を撥ね退けてベッドに立った後は、現実の父から「象徴的父」に変容している。(Hiebel 120) だとすれば象徴化はロシアの友人の特権的な属性ではありえない。だからポリツァーのように象徴の存在論的性格から父の態度変更を説明するのは成功しないのだ。

ゾーケルは、「おまえは本当にペテルブルクにこの友人がいるのかね？」という父の問いをこう解釈する。父の問いは友人の事実上の存在に関するものではなく、友人「である」かどうか、にも関するものだ、と。「だからこの問いは、友人がまだ本当に友人であるのか」、という問いであるばかりでなく、ゲオルクが真の友人であるのか、彼の友人を友人扱いしているのかという問いでもある。……彼の＜労わり＞はゲオルクが友人を危険な敵として扱ったことを示している……だからペテルブルクに友人がいるとゲオルクが言うとき、彼は嘘をついているのだ。」(Sokel I 56) しかし父の問いはゾーケルの言うように、友人が友人の名に値する存在であるのかというように立てられていない。むしろ友人のいる場所に関して問われている、「選りによってそこに(gerade dort)

友人がいるはずがあろうか」と言うように。だとすればこの父の否定は、ゲオルクに向かって「おまえは友人をペテルブルクにではなく、ここに持っている」、つまり「俺は当地での彼の代理人だ」という答えを誘いだす呼び水なのではなかろうか？

Ⅸ）ロシアの友人＝「作家」は存在しうるか？

しかし父が友人の存在を否定するのは、保留なしに文字通りの存在の否定だという風にも解釈できる。その場合作家とはいったい何か、という根源的な問いが問われることになる。マックス・ブロート宛の手紙でカフカは、作家について「塵からさえできていない」と、語っている。

> 一生涯私は死んでいたが、今や本当に死ぬだろう。私の人生は他の人々の人生より甘美だったが、私の死はその分だけいっそう恐ろしいものとなるだろう。私の内部の作家はもちろん即座に死ぬだろう。だってそのような形象にはどんな地盤もなく、永続性もなく、塵からさえ出来てはいない。そのような形象は気違いじみたこの世の生活においてほんの少し可能であるに過ぎず、享楽欲というひとつの構成に過ぎないのだ。これが作家だ。(Br. 385)

トーマス・マンやリルケのような職業作家なら、あるいは「作家」をもっと実体化して考えることもできただろう。この生身の人間が即作家だ、というように。しかし職業的には官吏であったカフカは、ただ書く限りでしか自分が作家であるという意識をもてなかった。作家は実は「物語る声」でしかない。このような「物語る声」について、最も鋭い考察を下したのはモーリス・ブランショであった。

> 他方では物語る声は自分の実存を持たず、どこから話し掛けてくるのでもなく、物語の全体のなかの宙に漂っているが、だからといって、その声が、それ自体眼に見えないで、ものを見えるようにする光のやりかたで物語のなかに満遍なく配分されることもない。そうではなくてその声は根源的に外にある、それは外部性そのものから、書かれた言語(language)に固有な謎であるこの外部からやってくるのだ。……隔たりのない距離によって、外部にある限りでのみ内部にある物語る声は、受肉することはないのである。(Blanchot: De Kafka à Kafka. Gallimard. 1981. p.182)

「物語る声」は根源的に外部にある。つまり「物語る声」は物語のなかで直説

法的に語らないということだ。物語る声は物語の中にある、と読者が信じて、テクストの中に聴き取り、読み込んで行くその「声」である。ここではリヒテンベルクが巧みに語ったように、「そこでは作者が言葉を、読者が意味を提供する」(nach Freud: GW Ⅵ S.93) という事態が生起している。読者は聴き取ったと信じる「声」を、作品そのもののなかに帰属させ、そこに記入する。読者はそれを自らが、テクストから編みだし、紡ぎだしたことを忘れている。この声こそ、解釈そのものに他ならないのに、読者は自分の「犯行」を忘失して、その声は初めからそのままの姿で、テクストのなかにあったと錯覚するのだ。一歩譲って、解釈がテクストと読者のコラボレーションだとするなら、聴き取られた「声」はまさに、「外部にあるがぎりでのみ内部にある」と言えよう。ではカフカ自身はこの「声」についてどう語っているのだろうか？

カフカは「猟師グラッフス」の異文と思しき断片の前置きにこう述べている。

> 私が聞いたこと、私に打ち明けられたことを、私はいま書き下ろしている。しかしそれは守秘義務のある秘密として打ち明けられたのではなく、話す声として直接私に打ち明けられたのだ。その他は秘密ではなくむしろ籾殻のようなものだ。仕事がなされるとき、四方八方に飛び散るものは、伝達されうるもの、伝達されるようにお慈悲を乞うものだ。なぜならそれに命を与えるものがさらさらと流れ去ると、置き去りにされても、じっとそのまま留まっている力がそれにはないからである。(N Ⅱ 503)

ここでカフカは「話す声」に対比して「言葉」を外部的なもの、籾殻に喩えている。「声」、それは書き留められた言葉に「命を与えるもの」ものだ。しかしこの「声」はそれが書き留められるやいなや、「さらさらと流れ去る」のだ。「声」には、「置き去りにされても、じっとそのままに留まっている力」がない。その「声」は物語のテクストにとって絶対的な「外部」であり、その絶対性ゆえにかえって内部のものたりうるのである。ブランショの言う「外部にあるかぎりでのみ内部にある」とは、まさにこの事態を指している。内部と外部のこの距離には隔たりがない。それはかつて「あったであろう」と想定されるものにすぎず、読者はこの空虚を埋めては、埋めたことを直ちに忘れ去る。なぜなら書かれた言葉が「伝達されるようにお慈悲を乞う」からである。お慈悲を乞われた読者は、「さらさらと流れ去る」声を求めて作品を彷徨うべく運命づけられている。

物語る声がこのようなものであるなら、それは存在と非在のあいだにしか位置し得ない。つまりゲオルクの父が、なぜロシアの友人をあるときは否定し、

あるときは肯定する両義的揺れを示すかといえば、それは作家の、物語る声の存在論的な両義性によるのだとしか解しようがない。

ブランショの文言の背後には、ハイデガーとラカンの言語論のエコーを聞くことができる。

ハイデガーは「言葉への途上」という論文で、

> <話されたこと>は多様な仕方で<話されなかったこと>から由来している、この<話されなかったこと>が<まだ話されなかったこと>であれ、<話すことに譲り渡されないものという意味で話されないままになっているもの>であれ。
>
> (Heidegger: Unterwegs zur Sprache, Günther Neske 1959 S.251)

と述べ、さらにこう続ける。「まったく言われぬままに留まらねばならぬものは、言われぬものの中で差し控えられており、秘匿されたもののなかで示されえないものとして滞留しており、秘密なのだ」(US. 253) と。この秘密はどのようにして明かされうるのか？ハイデガーはそれを「言葉が話す。Die Sprache spricht.」という単純な定式で示す。彼自身がこの定式の矛盾について「言葉が話す。言葉が？人間ではなくて？」(US S.20)と反問している。人間の語る言葉、そのなかでもう一度、言葉がそれ自身を語り直すのである。言語がそれ自身のなかに二重に折れ込んでいくこの複雑な関係を、ハイデガーはさらに別の定式で提示する。「言葉としての言葉を言葉へともたらす／言葉を言葉として言葉へともたらす(Die Sprache als die Sprache zur Sprache zu bringen)(US S.242,261)と。これが解釈とはなにかということへのハイデガーの答えである。

言葉として言葉へともたらされた言葉、それが解釈であり、同時に隠喩である。比喩的に語るなら、失敗したカラー印刷が色ずれを起こしているように、隠喩的な物語は、物語それ自体に対して「意味ずれ」を起こしていて、この「意味ずれ」の部分が「無意味」として感受されるのである。しかしこの「無意味」の部分にこそ、主体、無意識の主体が解釈として実現される可能性が秘められている。ラカンは「この無意味の部分こそが主体の実現において、無意識を構成するまさにそのものなのです」(Se XI 192)) と語っている。無意識の主体＝エスはまさにここで、語ることなくして、語っているのである。

この意味で「ロシアの友人」はまさしく無意識の主体＝エスである。

このようにして「ロシアの友人」は作家であるという規定は無理なく、「ロ

シアの友人」はエスであるという規定と通じ合ってしまう。この指摘によって、内在的解釈は、精神分析的解釈と通底する。

カフカ研究史に初めてフロイトの第二局所論を導入したティーフェンブランはこう書いている。

> 無意識は一九一二年にはたいていの心理学者によって、今日その定義が混乱しているのと同様に、緩やか(loosely)にしか定義されていなかった。この事情はカフカが自分を三つの部分に分解するのを妨げなかった。また、彼が自分の外的なイメージを、緩やかに定義して彼の自我、つまりゲオルクとして、また彼が自分の無意識と呼んだ自分の内部の深部をロシアの友人として、そして彼の暴君的な良心、あるいは超自我をベンデマン氏として記述することも。(Tiefenbrun, Ruth: Moment of Torment. An Interpretation of Franz Kafkas' Short Stories 1973 p.87)

この見解は大まかに言って正しい。しかし厳密にいえば、間違いである。ティーフェンブランが「緩やかに定義して」としか言えないところが問題である。

X）存在の三分割—ブロート：『女王エスター』を読むカフカ

カフカは1917年の末にマックス・ブロートから彼の戯曲『女王エスター』を贈呈され、詳しい感想を書き送っている。その読解は彼独特のもので、カフカは問わず語りに自分の文学の秘密を漏らしているように思われる。カフカは、『女王エスター』の三人の主要な登場人物について、彼らがじつは一つのものに過ぎず、三位一体であり、ブロートの存在(Wesen)を三つの部分に分割したものであると、分析している。この解釈を少し詳しく追ってみる。

> この作品に対する私の理解力は不十分だった。それは次のような事情によって、なにか必然的に真ならざるものが与えられているという、根本的な難解さによるのかもしれない。その事情とは、三人の俳優は一つのものにすぎなくて、技法的にも芸術的にも三位一体だということ、そしてこの三位一体は、そのお互いの中をまさぐりあう(wühlen)もろもろの部分を通じて、そのような前提や、緊張や、洞察や、帰結を成立させているのだが、これらはもしかすると大部分といっていいかもしれないが、ともかく部分的にしか、真実ではないか、より正しく言えば、魂の歴史にとって無条件に必然的なものだ、という事情なのだ。(BKB S.212)

吉田仙太郎訳になる新潮社版全集の『手紙』は、まことに優れた訳だが、

wühlen を、「お互いに深く噛み合っている」と意訳し、原意をこなし過ぎて、台無しにしている。この wühlen という語こそ、カフカのブロート解釈とカフカの『判決』の自己解釈を繋ぐ重要な環なのだ。この幾分エロチックなニュアンスを帯びた語をカフカが『判決』の自己解釈に用いているのを読者は忘れてはいないだろう。

> ペテルスブルクの友人は父と息子を結ぶもの、彼らの最大の共通性である。自分の部屋の窓際に一人座ってゲオルクはこの共通なものを官能的な悦楽を覚えながら、ほじくり返し(wühlen)、父を自分の中に持っていると信じて、ちょっとした悲しい憂慮すべきことを除いては、すべてを平穏だと思っている。(T. 491)

ブロートの戯曲『女王エスター』の読解において、カフカは『判決』の自己解釈をそのまま当てはめているといえば過言だろうか？カフカはこの書簡のはじめにブロートと二人の女性との三角関係について助言をし、その際「この解釈は勿論あまりにも私の極印を帯びすぎている」と言っているが、『女王エスター』の読解も同様である。これが何を語っているかは、もう解説するまでもない。カフカが『判決』の人物構成、ゲオルク・ロシアの友人・ゲオルクの父、において、「三人の俳優は一つのものにすぎなくて、技法的にも芸術的にも三位一体だ」ということに対して自覚的であったということである。そしてこれこそが多分カフカが『判決』を書いた際に、「もちろんフロイトのことを考えた」(T. 461)最大の理由ではなかっただろうか？なぜならフロイトは『夢判断』以来意識の質を三分割していた。無意識、前意識、意識というように。カフカは明敏にも無意識にロシアの友人を、前意識にゲオルクの父を、意識にゲオルクを振り分けたのではなかったろうか？もちろんフロイト自身は、第一局所論が第二局所論と重なり合わないことを繰り返し強調している。しかし第二局所論で超自我が、エスを代弁するものとして構想されているかぎりで、超自我は、本来沈黙しているエスを言語化する「語る審級」であるはずだ。そしてフロイトは「無意識」論文(GW X S.263-303)で、意識的対象表象を言語表象と事柄表象に別け、「前意識体系は、事柄表象がそれにふさわしい言語表象と結合されることを通じて過剰備給されることによって成立する」(GW X S.300)と指摘している。だとすれば前意識と超自我は、言語化という一点において、機能的に対応するはずである。私たちはまず「自我とエス」からの引用で、エス・自我・超自我の関係を確認し、その後で「無意識」論文で、無意識・前意識・意識の関係を参照しよう。

自我が本質的に外界、現実の代理者であるのに対して、超自我は内界、エスの代理人（代弁者=Anwalter）として自我に対立する。(GW Ⅷ S.264)

超自我は不断にエスと密接な関係を保ち、自我に対してエスの代表者として振舞う。超自我はエスのなかに深く潜入し、そのために自我に比べて意識から遠く離れている。 (GW Ⅷ S.278)

すべてこれらの状態では、超自我は意識的自我からの独立と無意識的エスに対する親密な関係を証示している。さて私たちが自我のなかの前意識的な言語残渣に帰した意味を顧慮するなら、超自我は、もしそれが無意識的なら、そのような言語表象から成り立っていないか、そうでなければ何から成り立っているのか、という問題が浮かんでくる。謙虚に答えるなら、超自我が聴かれたものから由来するのを否定できはしない、超自我はじつに自我の一部であり、これらの言語表象（概念、抽象）から自我に接近しうる。しかし備給のエネルギーは、授業や読書などの聴覚的知覚から自我の諸内容にもたらされるのではなく、エスにおける源泉からもたらされるのである。 (GW Ⅷ S.282)

このように「自我とエス」ではくどいほど、超自我とエスの親密性と超自我の内容の「前意識的な言語残渣」の性格が強調されている。この「前意識的な言語残渣」が何を意味しているかは、「自我とエス」の（Ⅱ）で「無意識」論文を要約しながら、無意識的表象が、認識されないままの、なんらかの材料によって成就するのに対し、前意識的表象は言語表象との結合が付加されている、と明瞭に対比している。そしてこれらの言語表象は「記憶残渣」(GW Ⅻ S.247) なのである。フロイトはこの「記憶残渣」を言語残渣とも呼んでいる。なぜなら「かつて一度は意識的知覚であったものだけが、意識される」(同) からである。「感情を除いて、内部から意識的になろうとするものは、外的な知覚にとってかわろうと試みなければならない」(同) のだ。さらにフロイトは、言語表象の役割を、「その仲介によって内部の思考過程が知覚になる」(GW Ⅻ S.250) ことに求めている。これは重大な発見であって、人間の知覚は言語の仲介なしには成立しえないことがここで明らかにされている。この過程は「無意識」論文ではさらに詳細に展開されている。フロイトは意識される表象と意識されない表象を分かつのは、それぞれが異なった心理的な場所に同一内容の異

なった仕方で記載されるのでもなく、また同じ心理的な場所にそれぞれが異なった機能上の備給状態にあるのでもないとしている。

意識された表象は事柄表象を、それに相応しい言語表象を伴って含んでいるのに対し、無意識な表象は事柄表象だけしか含んでいない。無意識体系は対象の事柄備給を、従って第一の、本来的な備給を含んでいる。前意識体系は、事柄表象がそれに相応しい言語表象と結合されることを通じて過剰備給されることによって成立する。このような過剰備給こそ、高次の心的機構を招き寄せ、前意識を支配する二次過程によって、一次過程の解消を可能にするものであると、私たちは推測できる。(GW X S.300)

フロイトはここで『夢判断』の最後で述べた一次過程と二次過程の差異を精緻化している。『夢判断』ではふたつの過程を言語化の問題と明示的には絡ませていない。言語の問題は、症例で具体的に述べられているのみである。「賢く無邪気そうなまなざしの少女」が、「何かが体の中に入っているような、体の中で行ったり来たりするような気がする」と訴えるのを聴いて、フロイトは少女が「自分の言ったことの重大さをまったく予感していなかった、予感していたら口にしなかっただろう」と述べている。ここでは検閲を潜り抜けた事柄表象が「それに相応しい言語表象」を伴わずに、表象自体として出現している。

本論でなぜこんなフロイトの理論に立ち入ったかは、すでに暗示した通り、カフカが『判決』を書いた際に、「もちろんフロイトのことを考えた」(T. 461)、その理由を推理するためである。すでに拙論（Ⅰ）の第Ⅰ章(p.113)で述べたように、カフカの『判決』は一九一二年に成立し、フロイトが第二局所論（自我・エス・超自我）を初めて導入したのは一九二三年の「自我とエス」である。確かにカフカはすでに一九一二年にフロイトの第二局所論に近い自己了解に達していたようにみえるとしても、一九一二年のカフカが、フロイトの第二局所論の影響を受けた可能性はありえないのだから、カフカ研究はカフカがどのような過程を経てそこに到達したかを提示できなければならないだろう。この要請からフロイトの第一局所論と第二局所論の対比と比較を試みてきた訳だが、カフカがフロイトの『夢判断』を読んだと仮定してみる。はたしてカフカは『判決』執筆以前にフロイトを読んでいただろうか？カフカが『判決』執筆の約二ヶ月前にヴィリー・ハースに宛てた書簡が、カフカ研究家達を動転させるような事実を明るみに出した。この新たに発見されたカフカの書簡は、一九九九年に出版された批判版『手紙』に収録されている。

フロイトからは前代未聞のことが読めると信じています。私は残念ながら

フロイトのものをほとんど(wenig)知りませんが、彼の弟子達のものはたくさん読んでいて、だからフロイトに対しては大きいが空虚な尊敬を抱いているだけです。貴兄の蔵書にあったフロイトの本に関しては、貴兄がその本を読めたのはぼくのお陰なんだぞ。だって貴兄の家に行ったとき、その本に手を伸ばしかけていたのだから。(Br. I 162, 1912-7-19)

カフカはフロイトの本に手を伸ばしかけたが、思い直してヤーコプ・グリムの本を借りてしまった。それも文学史家ヘルマン・グリムの本を借りるつもりで間違えてしまったのだ。この挿話が語るのは、カフカが精神分析に関心を持ちながらも、文学史の本を優先させたことである。カフカが『判決』執筆までに、この補いをどうつけたか、残存する資料はそれについてはなにも語らない。しかしカフカが『判決』執筆直後に「フロイトのことを考えた」(T. 461)からには、七月一九日から九月二二日の間にフロイトを読んだに違いない。『夢判断』は一九一一年にその第3版が出ているから、入手し易かっただろう。『機知』(1905)は一九一二年に第二版が、『日常生活の精神病理学』(1901)は一九一〇年に第3版が、一九一二年に第四版が出ているが、カフカの夢に関する深い関心から押して、『夢判断』の可能性が高い。『夢判断』の最後を飾る第一局所論から、一九二三年の「自我とエス」の第二局所論までの道は遥かだが、すでにカフカの『女王エスター』の分析からも明らかなように、カフカが存在を三分割する方法に充分自覚的であったのは疑いえないし、それがフロイトの三分法(無意識、前意識、意識)に影響を受けているのではないかという仮定は無理ではないだろう。ただカフカがフロイトの第一局所論から第二局所論までの道を自力で解決したという推測にはかなり強引さが伴うことを認めるに、やぶさかではない。しかし次の章で検討するように、カフカの『判決』の構成は見事なまでにフロイトの第二局所論と重なっているのだ。

X) ロシアの友人と父の関係

ゲオルクの父は、それまでロシアの友人を否定していた態度を突如として変更し、「私は当地での彼(ロシアの友人)の代理人だ」(D 57)と宣言する。『判決』のなかでももっとも奇怪な箇所である。この箇所はフロイトの「自我とエス」の一節と驚くべき一致を示している。

自我が本質的に外界、現実の代理者であるのに対して、超自我は内界、エスの代理人(代弁者=Anwalter)として自我に対立する。(GW Ⅷ S.264)

エスはそれ自体としては沈黙している。精神分析家は患者に対し超自我の位置を占めるといわれるが、それはほんらい沈黙しているエス（患者は自分の病原を語れない）を代弁する位置にあるからである。精神分析とは解釈そのものである。文学の研究者が作品に対して採る位置と精神分析家が患者に対して採る位置は酷似している。文学の解釈も作品の無意識を「実現する」のである。『判決』の父は、ロシアの友人を代弁して、ゲオルクに死刑を宣告する。

カフカは、彼が「頭中に抱いている恐ろしい世界」(T 562)を言語化する場合、なにかが脱落していくことを痛切に感じざるを得なかった。「私がなにを言おうと、私の感覚の中では間違っているのです。話すことは、私が言うことのすべてから真剣さと重要さを奪ってしまいます。話すことには絶えず夥しい外面性、外面的強要が作用しますから、そうなるのは仕方がないと思われます。だから私は沈黙しているのですが、それは単に困り果ててそうしているのではなく、確信からもそうしているのです。書くことだけが私にふさわしい表現の形式です。」(F 448) 書くことはだから沈黙に迫りうる表現形式だといえる。作家カフカは、次第に沈黙に傾いていくロシアの友人に近い存在である。ロシアの友人が作家カフカの隠喩だとする解釈はだから妥当性を主張できるのである。

XI）なぜゲオルクは悪魔的なのか

カフカが善悪という倫理的な範疇で「書くこと」について肯定的に語ったのは、たった一度きりである。

> 書くことは私の本来の善い本質です。もし私になにか善いものがあるとすれば、これ（書くこと）こそそうなのです。もし私が解放されたがっているこの世界を頭の中に持っていなかったら、私はあなたを得ようなどという大それた考えに思いも及ばなかったことでしょう。(F 407, 1913－6－21～23)

しかし他方カフカは「書くこと」を否定的にも語っている。それは「悪魔への勤行なのだ」と。

> 書くということは、甘美なすばらしい報酬だが、しかしいったい何にたいする報酬だろう？児童用の実物教育の明瞭さで私に明らかになったのは、それが悪魔への勤行に対する報酬だということなのだ。暗いもろもろの力に降りていくこのこと、本性からいって緊縛されている幽霊たちを解き放

つこと、いかがわしい抱擁、さらに下の世界で起きているかも知れないこと、それらについて、上の世界で日の光を浴びて物語を書いていては、なにも知らないですむのだ。(Br. 384)

「書くこと」は、カフカの「本来の善い本質」なのに、同時に「悪魔への勤行」でもある。カフカが「書くこと」について抱いていた矛盾した評価、この両義性、これこそ『判決』でパースペクティヴが交替する根拠である。「友人の姿が交替するのは、もしかすると父と息子の関係のパースペクティヴが交替するせいかもしれません」(F. 397)

カフカ自身はこのふたつの相矛盾した評価のあいだで決定を下せなかった。なぜならそれらの関係は「一方が真なら、他方が偽」であるヴィトゲンシュタインの「真理表」(stw 501 S.46) の真偽のように単純にはいかないからだ。「書くこと」自体は善である。しかしその結果「書くこと」がカフカに、市民としてのカフカに強いたことは？例えば、フェリーツェ・バウアーとの婚約解消は？カフカは一九一四年七月二五日の『日記』に、ベルリンでのフェリーツェとの婚約解消に関して「罪がないにもかかわらず悪魔的」(T 659) と書き留めている。この言葉は『判決』論でしばしば引用されてきた。しかしこの文言が抱えこんでいる闇の構造については根底から問われたことがない。

パースペクティヴの交替はいかにして起こるのか？それはカフカのなかで相闘うふたりが善悪の仮面を交換するからである。もっともこれは原因というより、相関現象とでも言うべきもので、厳密な意味での原因—結果の関係ではない。

カフカはフェリーツェ宛ての手紙で「自分の中で闘う二人」について語っている。

私のなかでお互いに闘っているふたりがいたし、今もいます。ひとりはあなたが望んだとおりのもので、あなたの望みを実現するために彼に欠けているものを、彼は今後の発展によって手に入れるでしょう。しかしもう一方の男は仕事のことしか考えていず、仕事が彼の唯一の心配事です。仕事によって彼は、親友の死でさえ彼にとってはまず仕事の邪魔（たとえ一時的なものであっても）になるというこの上なく卑しい考えさえ彼に無縁ではないという風に仕向けられます。この卑しさを帳消しにするのは、彼が仕事のために苦しむこともできるということです。(F. 627)

前者がフリーダと婚約しているゲオルクに、後者がロシアの友人に対応するのは、疑いえない。ここで仕事といわれているのは、官吏としての職業のことで

はなく、文学的な仕事のことである。カフカにとっては、芸術が彼に人間としてのモラルを犠牲にすることを強いるとき、それを卑しさと感じる感性を捨てなかった。この点カフカはリルケと違っている。リルケは「一日の仕事日を失わないために、母親の葬式にいくことを拒んだ」セザンヌを讃えている（メルリーヌ宛。1920－12－16）が、カフカにとってはこのような芸術至上主義的な態度が許されるほど、芸術は特権的なものではなくなっている。カフカにとってそれは「いやしいこと」でしかなかった。

カフカは「自分の中で闘う二人」をフェリーツェ宛ての手紙でもう一度、今度は倫理的な範疇でとりあげる。

> 私のなかで二人が闘っていることは知っていますね。二人のうちより善いほうがあなたのものだということを私は最近少しも疑ってはいません。……私のなかで闘っている二人は、あるいはもっと正しく言えば、私がその責めさいなまれた残余（注―全体者としての自我の中の審判者に相当する部分）を除いて、それら二人の闘いから成り立っているのですが、善い人と悪い人です。彼らは時に仮面を交換し、それが縺れた闘いを一層縺れさせます。(F. 756)

一九一七年に書かれたこの手紙は、フェリーツェとの二度目の婚約期のものである。自分の婚約者に向かって、彼女を求めて結婚したがっている方の自分を「善」と呼ばざるをえないだろう。従って『判決』の文脈で言えば、ゲオルクは「善い人」で、ロシアの友人は「悪い人」ということになる。なぜなら作家にとっては、「親友の死」でさえ「仕事の邪魔」になるという「この上なく卑しい考え」さえ無縁ではないからである。書くことは「悪魔への勤行」なのだ。しかしこの関係は、『判決』の「父」の審判においては覆される。

ロナルド・スピアーズが次のように述べていることは鋭く肯綮に当たっている。「もしこれ（注―友人＝作家という仮定）が正しいとすれば、カフカが選りにも選って文学にまったく無関心な父に、商売に成功したゲオルクを非難させ、友人を賞賛させているのは、洗練された反語であろう。」(Speirs 96) この反論は極めて強力で、スピアーズが「ロシアの友人＝文学」という等式を否定する根拠となっている。しかしスピアーズが誤っているのは、『判決』の父をカフカの父ヘルマンと等値している点で、ゲオルクに死刑を下す父は、もはやカフカの父ヘルマンと関係のない、象徴的かつ非人称的な存在であり、フランツ・カフカの＜超自我＞としか呼べないものに化していることをスピアーズは見抜けなかった。ゲオルクが善で、友人が悪であるという判断が、ゲオルクが

悪で、友人が善であるという判断に逆転するこの転覆が、『判決』の理解に不可欠なまでに重要である。ここで「仮面の交換」が行われていることは疑いえない。

XII）溺死とは何か

父はゲオルクにこう死刑を宣告する。

> これでおまえは、おまえの他に何があるのかが分かっただろう。これまでおまえは自分のことしか知らなかった。本来おまえは罪のない子供だった。しかしより本来的には悪魔のような人間だったのだ。だから、いいか、私はいまおまえを溺死の刑に処す。(D 60)

ポリツァーは『判決』についてこう述べている。「もし私たちがもっと仔細に見るならば、ゲオルクの生活を語る物語のテクストには、そのような過酷な判決を正当化するいかなる負い目も発見できない。この物語が読者に課す謎の少なくとも一部は、この技術的な欠陥から生じている。」(Politzer S.100) ポリツァーの観察は正確であるが、判断は間違っている。父の過酷な判決を正当化するいかなる負い目もゲオルクには発見できない。しかしそれが「技術的な欠陥」だとは！もし死罪に値するような「ゲオルクの罪」が作品のなかに描かれていたら、『判決』は単なる「父に罰せられて自殺する息子の物語」になってしまう。六〇年代の『判決』研究は、いずれもゲオルクがあのように従容と父の死刑判決に従うのは、ゲオルクに罪があるからに違いないという予断から組み立てられていた。そうでないからこそ、『判決』は問題の作品であり、探求に値するのだ。

溺死とはカフカにとって何だったのか？カフカは一九一〇年の『日記』にこう書いている。

> 夜の十一時半。私が役所から解放されないかぎり、私は喪われているということ、このことは私には何にもまして明らかだ。私は溺死しないように、できるだけ長く頭を上に支えているだけで精一杯だ。 (T. 134 1910)
>
> 誰でも地下の世界から自分なりの仕方で浮かび上がります、私は「書くこと」によって。だから私は、……休息や睡眠によってではなく、書くことによって自分を上に保っていられるのです。私は休息によって書くことをうる、というよりむしろ、書くことによって休息をうるのです。
>
> (F. 595)

ここで自己喪失は溺死と同一視されている。役所は、つまり市民としての職業というあり方は、自己喪失を彼に強い、彼は「書く」という行為でしか自分を取り戻すことができない。この溺死のイメージはほぼ一貫してカフカの記述に現れる。すでに引用した一九一〇年の断片（汽船の旅人と木切れの漂流者の）（拙論（Ⅰ）p.126-7）はこのように続いている。

> というのも彼と彼の所有物は、一つではなく、二つであり、その結びつきを打ち砕くものは、彼をも一緒に打ち砕くのである。私たちと私の知人たちはこの点では見分けがつかない。なぜなら私たちはまったく覆われているからだ、例えば私はいま私の職業、想像上のあるいは現実の悩みや文学的な好みなどに覆われているからだ。しかし他ならぬ私はあまりにもしばしば、また強烈に私の水底（Grund＝根拠）を感じるので、中途半端では満足していられない。水底を一五分間絶えず感じさえすれば、水が溺死しかかった人の口に流れ込むように、毒を含んだ世界が私の口に流れ込むだろう。（T 114）

引用文の文脈にはいくつかの飛躍や混線があって、必ずしも辿りやすいわけではない。人間とその所有物は別物だが、同時に私たちは多くの所有物（職業、悩みや好み）などによって覆われているから、所有物と自分自身を区別できない。つまり水底に足が届かないと、自分の口に「毒を含んだ世界」が流れ込んでいることも感じられはしない。これが感じられるためには一五分間我に立ち返る（自分の根拠に触れる）だけで充分だ。職業としての役所が自己喪失、溺死を強いたように、自己を取り戻そうとする努力が、まさに自分が溺れつつあることを自覚させるのである。つまり「汽船の旅人」ゲオルクは「木切れの漂流者」ロシアの友人より「危険がより少ないわけではない」のだ。

この箇所はまた、ゲオルクの父が「私は充分覆われているかね？」（D56）とゲオルクに尋ねる箇所と並行関係にあり、またゲオルクに対する溺死の刑とも同じ関係にあることが、明瞭に看取できる。論理的に言えば、覆われているべきはゲオルクなのだが、「私たちと私の知人たちはこの点では見分けがつかない」から、父のほうに書き込まれているのである。

カフカは自分の両親について、1912年11月21日の手紙でフェリーツェに次のように述べている。

> 私は両親をいつでも迫害者として感じていました。もしかすると一年前まで両親にたいしても世界にたいしても、なにか生命のないことがらがそうであるのと同様に無関心であったのかもしれません。それは抑圧された

不安、杞憂、悲しみにすぎなかったことは、今にして解ります。両親は私を自分のところに、私がそこから息を継ぐために浮かび上がろうとしている古い時代に、自分たちのもとへ引きずり降ろすこと以外には何一つ望まず、もちろん彼らは愛情からそうするのですが、これが恐ろしいことなのです。(F 112　1912-11-21)

ここで「古い時代」といわれているのは、一般的な歴史の意味ではなく、カフカの個人史としての「古い時代」のことであって、例えば幼年期や思春期というほどの意味である。

カフカにとって抑圧者として現れた両親は、ここでは迫害者として現れる。かつての愛着の対象が、迫害者として現れるのは、パラノイアの兆候である。

フロイトは有名な「シュレーバー症例」(正確には、「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」(1911))において「感情の意味が、外的な力によって投影され、感情の基調が逆転される。迫害ゆえに現在憎まれ、恐れられている人が、かつての恋愛や崇拝の対象であったのである」(SW Ⅷ S.276)と述べている。またフロイトは別の定式化を試みている。

迫害性パラノイアの場合は、患者はある特定の人との強い同性愛的結合をある仕方で防いでいるが、その結果かつて激しく愛した当の本人は迫害者になり、この人に対して患者はしばしば危険な攻撃の矢を向ける。」

(SW Ⅻ S.271「自我とエス」フロイト著作集6-287)

カフカも幼少期には父を敬愛していた時期があった。例えばカフカは父が「商才を発揮するのを驚嘆して見ていた」(NⅡ S.172)ことを「父への手紙」で書いている。また彼は父に「あなたは特に美しい、稀にしか見られないような、静かな、満足した、是認するような、それが向けられたひとを幸福にする微笑みかたをなさいます」(NⅡ S.165)と告白している。このような父への純粋な愛情から、両親が「迫害者」であるという感情へは、「感情の基調の逆転」を想定するしか理解の道がない。

カフカの前に突きつけられた選択は、パラノイアかメランコリーか、父を迫害者として非難するパラノイアの道を選ぶか、それとも父に断罪されるメランコリーの自虐の道を選ぶかという選択であった。次のブロート宛の手紙の一節ほど明瞭にカフカの選択を物語るものはない。

「私が書いていることのすべてから、私が迫害妄想にかかっていると思ってはならない。どんな場処も必ずなにかに占拠されていることを、私は経験から知っている。だから私が、私のうえの鞍に坐っていないときには、

いやそのときにのみ迫害者がそこに坐っているのだ。」(BKB 313)
自分の上に自分が座ること、それはカフカがすでに『ある闘いの記述』以来馴染んできた表象である。この作品の第二章で「私」は知人の肩に飛び乗って、知人を馬のようにあしらっている(N I S.72)。これは、自我とエスの関係とも超自我と自我の関係とも読めるが、ここでは後者と解しておく。カフカにとって重要だったのは、自虐を選ぶことで、メランコリーを選択するほうが、パラノイアの迫害妄想を選ぶより、倫理的な選択だったということである。これこそカフカが「私は自分が絶えず行っている自虐が、余計なものでは全くなくて、それどころか最高度に必然的なもの」(F. 359 1913-4-7)と考えざるをえなかった理由であり、また「自虐においてのみ創造的」(T. 729, 1915-2-25)であった理由でもあった。

カフカとメランコリーの関係はすでにペーター＝アンドレ・アルトの論文(Alt, Peter＝André：“Das Gute ist in gewissem Sinne trostlos”—Motive der Melancholie bei Kafka, in <Modern Austrian Literature> Jg.21, 1988, H.2 S.55-76)があるが、残念ながら、「カフカのメランコリー患者たちは、彼ら自身の理性の犠牲者なのだ」という馬鹿げた前提から出発して、「憂鬱」(S. 58)、「反省傾向、自己観察、憂悶」(S. 72)を指摘する惨めで、表面的なものに止まっている(彼はこの論文に『判決』を挙げていない)。カフカの主人公は、「理性の犠牲者」なのではなくて、「死の欲動の犠牲者」である。アルトがこれを指摘できないのは、彼がフロイトの論文「喪とメランコリー」しか参照せず、「自我とエス」を知らないからである。

私たちはここから、「なぜゲオルクは父の死刑宣告に従順に従うのか」という問題に切り込んでいこう。

XIV) なぜゲオルクは父の死刑宣告に従順に従うのか？

カフカは『日記』にこう述べている。

> 私がかつて書いた最良のものは、満足して死ねるというこの能力にその理由がある。これらの強い説得力のある、優れた箇所でつねに問題となるのは、誰かが死に、それが彼にとってとても辛いことで、その点に彼にとっての不当さ、少なくとも過酷さがあって、これが読者にとって、少なくとも私の意見では、感動的になるのだ。しかし死の床で満足していられると信じている私にとっては、そのような叙述は、こっそり言うと、ひとつの

戯れであり、私は死につつある者の中で死ぬことを楽しんでいるのであり、だから読者の死に集中した注意を計算に入れて利用し尽くしているのである。ところが読者より、自分の死の床で嘆くものと私が仮定している読者より、私はずっと明晰な分別を備えている。だから私の嘆きは能うる限り完全であり、実際の嘆きのように中断しないで、美しく純粋に伸びていくのだ。(T. 708)

ゾーケルはその優れたカフカ論でこの箇所を引用(Sokel Ⅰ S.68-69)した前後から、それまでゲオルクを犯罪者まがいの扱いをしていた論調を一転して、不可解なことを主張し始める。「友人はゲオルクにとって、それを通じて彼が自分の行く道を見出す、単なる触媒にすぎない。友人に従うのは、アイロニックに見られたカフカの登場人物たちが陥る誤謬である。」(Sokel Ⅰ S.66) あるいは、「ゲオルクは『判決』において、<死に身を委ねる>が、結局は二人の友人のうちでより正しい者である。」(Sokel Ⅰ S.68) これらの指摘から、ゾーケルは、ニーチェの『悲劇の誕生』の図式に合わせ、プロクルステスの寝台よろしく、『判決』を切り縮めて、「融和劇」へと搬送していく。「ニーチェによれば観客は悲劇的主人公の末期を愉しむが、それは個別化の原理がもっとも輝かしく代表されている、主人公の死とともに失われていた自我と全体との、個人と社会との、人間と世界との一致が象徴的に回復されるからである。」(Sokel Ⅰ S.69) この読解の不可解さをもっとも鋭く抉ったのは、ローレンス・ライアンであった。彼はゾーケルの論理は、「私たちの考察の対象である物語を逆立ちさせたもの」(Ryan S.164) だと論難した。この批判はまったく正当である。『判決』が「全体との融和」(Sokel Ⅰ S.69) を読者に愉しませる融和劇だとしたら、カフカがなぜ『罰』という題名で、『判決』、『変身』、『流刑地にて』の三作を抱き合わせて一冊にまとめようとしたかが、理解できない。『判決』は罰の劇であって、融和の劇ではない。

ゾーケルの誤解は、ゲオルクが身を投げる「河」を、「生の流れ」の隠喩として読むというそれ自体では優れた、しかし解釈の方向はまったく逆の読解を行ったせいである。「生の流れ」という表現は、カフカの『日記』から採られている。

両親がトランプをしている。私はまったく疎遠に一人でそばに座っていた。父が、私も一緒にやるか、少なくとも傍で観戦すべきだ、と言った。……にもかかわらず、私は拒絶した。それに照らして判断するかぎり、私が次のようにわが身を嘆くのは不当なのだ。その嘆きとは、「生の流れが私を

捉えたことは一度もない、私はプラハを去らなかった、スポーツや手仕事に出くわしたことは一度もない」などといったことだ。私は多分申し出を、ちょうどトランプへの招待を断ったように、いつでも拒絶してきたのだろう。……（T. 870　強調、引用者）

カフカの言う「生の流れ」は、ゾーケルがニーチェ風に解釈したように、輝かしい形而上学的な光輝に包まれた「生」ではなく、むしろXII章冒頭（P.84～）で見たように、そこに溺れたら自己喪失に襲われる恐怖の対象であり、そこからは「毒を含んだ世界」が彼の口に流れ込む忌避すべき対象であった。そこへ行け、と命じられることは「罰」以外のなにものでもなかった。勿論カフカとても「生」に憧れなかったわけではない。だからこそカフカは「嘆く」わけなのだが、ゾーケルのように『判決』の文脈でカフカの「生の流れ」をニーチェ風に解釈してしまうと、『判決』を「逆立ちさせて」しまう結果につながる。

ではゲオルクはなぜ父の死刑宣告に従順に従うのか？カフカの自己注釈はゲオルクが孤立し、「なにも持っていないから」というものであった。

そしてゲオルク自身は、父への眼差し以外にはもはやなにひとつ持っていないというただその理由で、父をゲオルクにとって閉ざす判決は、かくも強烈にゲオルクに作用するのである。（T. 492）

これはカフカ自身の注解ではあるが、これだけでは読者を充分に納得させはしない。私たちはフロイトの観点を再度参照することにしよう。

フロイトはメランコリーの機制を説明する際、「超自我が死の欲動の一種の集合場所」になる理由をこう述べている。

「ひとが外部への攻撃性を制限すればするほど、自我理想においては厳格で、自己自身に対しては攻撃的になるのは、注目に値する。……

超自我は父という模範との同一化によって生じたものである。こうした同一化は脱性化と昇華という性格を備えている。こうした変化が発生する際には、欲動の解離も同時に発生すると想定することができる。昇華のあとでは、エロス的な要素は、そこに含まれる破壊性を拘束する力を失ってしまうので、破壊性は攻撃傾向、または破壊傾向として解放される。この解離のために自我理想は、「……せよ」と命令する＜当為＞となり、苛酷で残忍な性格を帯びることになるのである。

（GW VIII 284-285　邦訳『自我論集』（ちくま学芸文庫）「自我とエス」p. 265～6）

フロイトはエスのリビドーにはほんらいエロス的要素（自我の統合機能）と破壊的要素（死の欲動）が未分化なまま含まれていると考えていた。しかし超自

我の成立は、自我に破壊的な要素の抑圧を強いる。抑圧された破壊的な要素は行き場を失って、エスから超自我に流れ込む。つまりエロス的要素（自我の統合機能）と破壊的要素（死の欲動）は、解離してしまう。従って「超自我は過度に道徳的で、エスのように残酷になりうる」という事態が生ずる。そしてこれこそ『判決』がその中核に秘めている最大の秘密である。

ゲオルクに死罪にあたる罪はない。ゲオルクは自分が無罪なのを重々承知している。にもかかわらずゲオルクが欣喜雀躍の態で父の死刑宣告を実行するのは、「欲動の解離」という現象を除外しては理解できない。ロシアの友人はエスに相当するが、同時に作家として構想されており、本来は自我が持つべき統合機能を担っている。つまり昇華したエロス的要素（統合機能）に純化された存在である。では本来エスに含まれていた破壊的要素、「死の欲動」はどこへ行くのか？それはロシアの友人から逃れ去って、ゲオルクの父によって代理される。つまりゲオルクの父は「純粋培養された死の欲動」を代表する。

> メランコリーについて検討しよう。過度なまでに強い超自我は、意識を独占し、容赦ない厳しさで自我を脅す。まるで超自我は個人のなかであらん限りのサディズムを発揮するかのようである。サディズムの理論によると、破壊的な要素が超自我のなかに沈殿し、自我に向けて使用されるかのようである。いまや超自我のなかで支配しているのは、純粋培養された「死の欲動」である。自我があらかじめ躁病にかかることによって、暴君から自分を防衛していない場合には、この超自我が実際に自我を死に追いやることに成功する場合も多いのである。　(GW Ⅷ 283)
>
> 自我は一方では無罪なことを知っているのに、他方では罪障感をおぼえ、説明不可能な責任をおう。私たちに仕掛けられた謎は当初思えたほど大きくはない。超自我の振舞いは極めて理解しやすい。自我における矛盾は、自我が抑圧によって、エスに対しては門戸を閉ざしているが、超自我からの影響にはまったく無防備なままになっていることを証明しているだけだ。なぜ自我が超自我の過酷な批判から身を引こうとしないのかという次の疑問が浮かんでこようが、実際多くの症例でその通りなのだという報告がけりをつける。
>
> (GW ⅩⅣ S.147, フロイト著作集　6—341「制止、症状、不安」)

「破壊的な要素が超自我のなかに沈殿し、自我に向けて使用されるかのようである。いまや超自我のなかで支配しているのは、純粋培養された「死の欲動」である。」フロイトのこの言葉に注釈が要るだろうか？ ゲオルクの父（超自我）

のゲオルク（自我）に対する振舞いは、まさにこの通りである。

「自我があらかじめ躁病にかかることによって、暴君から自分を防衛していない場合には、この超自我が実際に自我を死に追いやることに成功する場合も多いのである。」これには注釈が要る。スタインバークやヴォルフーダニエル・ハルトゥヴィッヒが代表する宗教的解釈は、『判決』がユダヤ教の祝祭日ヨム・キップル（贖罪日）に書かれたことを重視し、ユダヤ教の立場から父を神と解釈する。だがカフカ自身は、自分を同化ユダヤ人の典型と見なしていた。「私は、私が知る限りで、彼ら（西方ユダヤ人）のなかでもっとも西方ユダヤ人的な人間です。」(M S.294) カフカ文学をユダヤ教に結びつけようとする試みは後を絶たないが、ユダヤ教の贖罪日だから、神が主人公に溺死を命ずる作品を書いたなどと、まったく出鱈目な解釈である。自ら顕現して、溺死を命ずる神！よくもまあこんな解釈がまかりとおるものである。

それならまだしも『判決』が、「泣き叫びたいほど不幸な日曜日の後に」(F. 394)書かれたのに注目することほうが重要である。カフカはこの日メランコリーの極点にいた。これはカフカ自身の証言で明らかだ。カフカは、この日妹ヴァリの婚約者ヨーゼフ・ポラックの家族の来訪を迎えて、文学どころの騒ぎでなく、「一日中親戚の間を黙ってうろつきまわっていた」(F. 394)このようなメランコリーの極点で、ゲオルクは死に追いやられる。しかしカフカは？カフカ自身は、自分の身代わりにゲオルクに自殺させておいて、鬱の極限から一転、躁状態に転じてしまった。「自我があらかじめ躁病にかかることによって、暴君から自分を防衛していない場合には、この超自我が実際に自我を死に追いやることに成功する場合も多いのである。」カフカはこれを地でいったのである。躁に転じた状態でカフカは一気に『判決』を書いた。その悲劇的内容と書いた人間の嬉しげな様子は、異様な対照をなしている。カフカはフェリーツェ・バウアーにこう書いている。「この話（＝『判決』）は、悲しく苦痛に満ちたものですが、朗読中の私の楽しげな顔をひとは理解しないでしょう。」(F. 144)

「自我は一方では無罪なことを知っているのに、他方では罪障感をおぼえ、説明不可能な責任をおう。」フロイトのこの洞察は、ポリツァーの次の観察を正当化する。「もし私たちがもっと仔細に見るならば、ゲオルクの生活を語る物語のテクストには、そのような過酷な判決を正当化するいかなる負い目も発見できない。」(Politzer S.100)メランコリーに構造的に内在するこの「無意識の罪障感」はフロイトにとっても最後のなぞのひとつであった。だからこそポリツァーが次のように断定するのは、まったく以って自分の優れた観察を帳消

しにする。「この物語が読者に課す謎の少なくとも一部は、この技術的な欠陥から生じている。」(Politzer S.100)こういう「合理主義」こそカフカの世界とまったく相容れないものだと、いまさら力説する必要があるだろうか？

結婚は「生の流れ」の呼びかけのうちもっとも魅惑にみちたものだ。カフカはフェリーツェ・バウアーとの出会いによって、この魅惑に抗えなかった。しかし同時にそれが何よりも彼が恐れている「溺死」＝自己喪失にいたる道であることも予感していた。だからこそカフカはロシアの友人（昇華され、エロスに純化された「エス」であり、カフカの内部の芸術家の形象でもある）に、「父」を通じて死刑を宣告させたのである。この「自己」内部のメッセージの伝達経路の入り組んだ構造こそ、カフカがゲオルクに「彼（＝ゲオルク）が友人に対して陥っている特殊な交信関係（Korrespondenzverhältnis)」(D. 47）という微妙な言い回しで暗示したものであった。そしてこの交信関係こそ、カフカの『判決』(1912）の十一年後、フロイトが「自我とエス」(1923)で辿りついた結論でもあった。よくみると、友人(Freund)のなかには、すでにしてフロイト(Freud)が書き込まれていたのである。

この論文は文部科学省の科学研研究費、課題番13610627「カフカとフロイト」の研究成果として発表されるものである。)

文献と略号　(Literaturhinweise und Abkürzungen)

A) Primärliteratur

Kafka, Franz: Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe. Hg. von Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasley und Jost Schillemeit. Fischer. 1982ff.

Br. I　Briefe. 1900－1912. Kommentierte Ausgabe in einem Band. 1999.

D　Drucke zu Lebzeiten. 1996.

N I　Nachgelassene Schriften und Fragmente. I 1993.

N II　Nachgelassene Schriften und Fragmente. II 1992.

P Der Proceß. 1990.
S Das Schloß. 1982.
T Tagebücher. 1989.
V Der Verschollene. Hg. von Jost Schillemeit. 1983.

Ap. Apparatband.
K. Kommentarband.

Gesammelte Werke. Hg. v. Max Brod. Fischer.
Br. Briefe 1902—1924. Hg. v. Max Brod. Fischer, 1958.
F Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit. (Fischer, 1967).
BKB Max Brod/Franz Kafka, <Eine Freundschaft>. Bd. II, Briefwechsel. Hg. V. Malcolm Pasley. Fischer, 1989.

Andere Autoren
SZ Heidegger, Martin: Sein und Zeit. Max Niemeyer. 1963
É Lacan, Jacques: Écrits. Édition du Seuil. 1966.
Sé XI Lacan, Jacques: Le Séminaire de Jacques Lacan. Quatre Concepts Fondamentaux de la Psychanalyse. Edition du Seuil. 1964.
GW Freud, Sigmund: Gesammelte Werke in 18 Einzelbänden. Fischer 1940~1968 (Liz. von Imago Publishing, London)

B) Sekundärliteratur

Alt, Peter = André : "Das Gute ist in gewissem Sinne trostlos"—Motive der Melancholie bei Kafka, in <Modern Austrian Literature> Jg.21, 1988, H.2 S.55-76

Asher, Evelyn W.: Urteil ohne Richter—Psychische Integration oder Charakter—entfaltung im Werk Franz Kafkas. Peter Lang. 1984. S. 31—57

Bartels, Martin: Der Kampf um den Freund. Die psychologische Sinneinheit in Kafkas Erzählung《Das Urteil》. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenshaft und Geistesgeschichte 56 (1982). S.225—258

Beharriell, J. Frederick: Kafka, Freud, and《Das Urteil》. in《Texte und Kontexte.

Studien zur deutschen und vergleichenden Literaturwissenshaft. Festschrift für Norbert Fürst zum 65. Geburtstag.》 Hg. v. Manfred Durzag [u. a.]. 1973. Francke Verlag. S.27—47.

Bernheimer, Charles: Letters to a Absent Friend. A Structural Reading. In: The Problem of 《The Judgment》. Eleven Approaches to Kafka's Story. Hg. von A. Flores. Gordian Press. (1977) S.146—167. (Bernheimer I)

Bernheimer, Charles: Flaubert und Kafka—Studies in Psychopoetic Structure. Yale University Press. (1982) S.139—188. (Bernheimer II)

Demmer, Jurgen: Franz Kafka. Der Dichter der Selbstreflexion. Ein Neuansatz zum Verstehen der Dichtung Kafkas, dargestellt an der Erzählung 《Das Urteil》. W. Fink. 1973.

Falke, Rita: Biographisch — literarische Hintergründe von Kafkas 《Urteil》. In: Germanische — Romanische Monatschrift 41 (1960) S.164—180.

Flores, Kate: 《The Judgment》 In: Franz Kafka Today. Hg. von A. Flores und H. Swander. The University of Wisconsin Press. 1964. S.5—24.

Hiebel, Hans Helmut: Die Zeichen des Gesetzes. Recht und Macht bei Franz Kafka. Wilhelm Fink. 1983. S.115—123.

Jahraus, Oliver [u.a.] (Hg.): Kafkas 《Urteil》 und die Literaturtheorie. Zehn Modell-Analysen. Reclam. 2002.

Gray, Richard T.: Das Urteil — Unnheimliches Erzählen und die Unnheimlichkeit des bürgerlichen Subjekts. In: Interpretationen-Franz Kafka. Romane und Erzählungen. (Hg.) von Michel Müller. Reclam. 1994. S.11—41.

Hartwich, Wolf—Daniel: Böser Trieb, Märtyrer und Sündenbock—Religiöse Metaphorik in Franz Kafkas 《Urteil》. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenshaft und Geistesgeschichte 67 (1993). S.521—540

Kaus, J. Rainer: Erzählte Psychoanalyse bei Franz Kafka — Eine Deutung von Kafkas Erzählung 《Das Urteil》. Winter. 1998.

Neumann, Gerhard: Franz Kafka. 《Das Urteil》. Text, Materialien, Kommentar. Hanser. 1981.

Marson, E. L.: Franz Kafka's 'Das Urteil'. Journal of the Australasien Universities Language and Literature Association. (University of North Queensland) 16 (1961) S.167—178.

Politzer, Heinz: Franz Kafka—Der Künstler. Fischer. 1965. S.87—104

Ryan, Lawrence: 《Zum letztenmal Psychologie!》 Zur psychologische Deutbarkeit der Weke Franz Kafkas. In <Psychologie in der Literaturwissenshaft>. Lothar Stiehm Verl. 1971. S.157—173.

Seidler, Ingo: Das Urteil: <Freud natürlich>?. Zum Problem der Multivalenz bei Kafka. In <Psychologie in der Literaturwissenshaft>. Lothar Stiehm Verl. 1971. S.174—190.

Schlingmann, Carsten: Literaturwissen—Franz Kafka. Reclam. 1995. S.68—80

Sokel, Walter H.:Franz Kafka—Tragik und Ironie. Langen & Müller.1964. (Sokel Ⅰ)

Sokel, Walter H.: Perspective and Truth in 《The Judgment》 In: The Problem of 《The Judgment》. Eleven Approaches to Kafka's Story. Hg. von A.Flores. Gordian Press.(1977) S.193—237 (Sokel Ⅱ)

Steffen, Hans: Kafkas 《Das Urteil》 : Drei Lebensmodelle und ihre Verurteilung. In 《Jenseits der Gleichnisse — Kafka und sein Werk》. Jahrbuch für Internationale Germanistik. Reihe A. Band 17.Peter Lang. 1983. S.97—127

Speirs, Ronald: 《Das Urteil》 oder die Macht der Schwäche. In. Franz Kafka. Text + Kritik. Sonderband. Edition Text+Kritik. 1994. S.93—108.

Steinberg, Erwin R.: The Judgment in Kafka's 《The Judgment》. Modern Fiction Studies 8. Nr.1 (1962) S.23—30

Tiefenbrun, Ruth: Moment of Toment. An Interpretation of Franz Kafka's Short Stories. Southern Illinois University Press. 1973. S.79—110

White, John: Franz Kafka's 'Das Urteil' —An Interpretation. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenshaft und Geistesgeschichte. 38 (1964). S.208—229.